

Humanitarian Activities for the Victims of the 2016 Kumamoto Earthquake

平成 28 年熊本地震 人道支援活動動レポート

活動概要

平成 28 年熊本大地震

2016 年 4 月 14 日午後 9 時 26 分ごろ、熊本を中心とする九州地方で強い地震が発生し、熊本県益城町では震度 7 を計測しました。その後、16 日午前 1 時 25 分ごろに震度 6 強の本震に見舞われ、14 日の地震で損傷の激しかった多くの家屋が倒壊するなどの被害が発生しました。

熊本県下では、震災により被害を受けた家屋（一部破損含む）が 32,408 棟に上り、その内、2,847 棟の家屋が全壊となりました。

震災発生から 100 日が経過しましたが、現在でも避難所の数は熊本県下 17 市町村で 96 ヶ所存在し、避難者数は 5,163 人となっています。

（2016 年 7 月 6 日 熊本県災害対策本部 発表）



活動目的

自宅の倒壊を免れた被災者の中には、度重なる余震発生から、いつ自宅が倒壊するかとの強いストレスを抱えている方々が多くいらっしゃいました。

今回の地震の特徴として、東日本大震災に比べ、死者の数は少なくとも、震度 1 以上の揺れが 2 週間で 1,000 回を超えるなど、度重なる余震への恐怖が被災者に強いストレスを与え続けていました。

余震により、万が一にも瓦礫の下敷きなどになった場合に、被災された方々の命を守る手段として携帯にも便利で電池も要らない『ホイッスル』を配布しました。この被災者の命を守る活動は、国連の友アジアパシフィックが展開している自然災害による被災者のこころのケア活動の一環です。



国連の友医療団から、『東日本大震災の時に、もしホイッスルを持っていたら、数千人の尊い人命が救われた筈である』との報告を受けておりました。震度1以上の揺れが2週間で1000回を超えるなど、度重なる余震により、万が一にも家屋が倒壊し、瓦礫の中に閉じ込められた場合、自分の存在を近くの人々に知らせることが出来るホイッスルは、被災者やその家族の方々の命を守るとともに、それを持つことにより東日本大震災以上と言われる余震の恐怖に対する精神的な安堵感を与えることが出来る支援物資と判断しました。



活動場所



被害の集中した益城町を中心とした避難所にてホイッスルを直接被災者の皆さまに配布いたしました。また、今回の特徴は車中泊をする避難者の多さです。2,200台収容可能な広い駐車場を持つ益城町のグランメッセ熊本は、町の指定避難所ではないために、公的支援の対象外となっていました。そのため、建物内への避難は出来ませんが、駐車場には多くの被災者が車中泊を続けており、車中泊をされている被災者の方々にもホイッスルを配布しました。更に、熊本市総合屋内プール・アクアドームくまもとでも、400台収容出来る駐車場も夜には車で埋め尽くされており、同施設では屋内、屋外にて配布活動を行いました。

主な配布活動避難所

- ① 熊本私立桜木小学校 ② 熊本私立桜木中学校
- ③ 熊本市総合屋内プール・アクアドームくまもと（屋内および駐車場）
- ④ 熊本産業展示場・グランメッセ熊本（駐車場）



ご支援いただいている皆さまのおかげで、ホイッスル配布時に被災された方々から多くの感想を頂いていますが、その中でも印象的なコメントをご紹介します。

“夜になるとこの駐車場で車中泊を続けています。屋間は半壊している自宅に戻って片付けをしています。夜寝ている時にまた地震がくるのではと子供が怖がって家で寝れません。このホイッスルがあると万が一の時も安心できます”

“お守り代わりにいつも身に着けます。家族全員に配りたいと思います”

“小さくても大きな音が出るので驚きました。私は一人暮らしなので、これなら何かあった時にも回りの人に知らせることが出来るので安心です”

いのちのホイッスル Friends Whistle!

～1本のホイッスルで救えるいのちがあります～

わずかでも呼吸がある限り、危険や存在を伝えられるホイッスルは、最後の危険回避、自己防衛になります。



多くの動物は、ホイッスルの代わりに想像を絶する奇声を発し、群れ全体に危険を知らせます。その音波は4～5 kmにも及びます。人間の奇声や大声の2～300 mとは桁違いです。手軽に携帯できるホイッスルは、どのような状況でも、ごくわずかなエネルギーで危険や存在を伝えることができ、状況によっては2 kmを超えて伝播することが確認されています。またホイッスルを吹くことで、肺の隅々まで酸素をいきわたらせることができ、それにより体内の老廃物や活性酸素を除去し、脳、心臓、自律神経を刺激し、弱体化した体を元気にすることができるのです。さらに、ガレキに閉じ込められ身動きがとれなくなった場合、血栓症静脈炎と

いって静脈が固まって肺血栓になり命を落とすエコノミー症候群をも、ホイッスルの刺激と音波のエネルギーで改善できることが分かっています。人間の危機管理能力は、第6感で危険を予知したり、防止したり、逃避したりします。

わずかでも呼吸がある限り、危険や存在を伝えられるホイッスルは、最後の危険回避能力、自己防衛能力といっていいでしょう。ホイッスルは、正に自分や家族、仲間を守るお守りであり、守護神であるともいえるでしょう。しかもそれを身に着けることで得られる精神的な安心感は計り知れないものと推測されます。

もっとも優れた危機管理能力を持つ**耳**

耳は人間が認識できない音も捉え、聴覚中枢に伝播します。これは動物が自然の変化を瞬時に察知できる能力とほぼ同質です。また耳の奥にある三半規管で平衡感覚や高度、暑さ寒さの温度感覚も皮膚以外に耳が感知して、危機状態を避けようとします。万一それらが異常を察知した場合、脳はその情報を総合的に判断して、元の状態に戻すよう指令を出します。耳がもっとも優れた危機管理能力をもつ理由は、危機管理の指令脳である脳下垂体や海馬との距離が、他の感覚中枢と比べ近いことにあります。ほぼ接しているほど近いのです。つまり耳は危機感知機関そのもののなのです。それらの意味において、ホイッスルは命の危険や存在を伝えるためには、自分にとっても家族にとっても、他人にとっても、最も有効的な存在です。

国連の友医療団